白雲臨書　風信帖（37）

川崎　白雲　先生

大恩人　川崎白雲先生

水嶋　山耀

大恩人　川崎梅村先生が生誕一〇〇年を迎えられる。今は亡くとも書道界では忘れられない大先生である。お禮の気持で一文を綴って見たいと思います。

Ⅰ　入門期に筆の面と墨線の関係。どうしてこの墨線が書けるかと、実際の表現と理論を教えられた。これが書の原点である。書くと塗るの違いを理解すること。

筆の使用法が根元となろう。

Ⅱ　文検合格後お礼に参上。「これからが一人前の書家となるのだ。書の門前に立った処だ。今後の努力で仲間入り出来るのだ」とのお言葉。梅村先生の一味異なる面をお見受けした次第。

Ⅲ　自分の子には教えられないと久子様の手ほどきを仰せつかる。奥様も吾一君をおんぶして毎週お見えになった。これ程信用して下さった梅村先生。

Ⅳ　富田林に第二師範女子部の創設。そこへの就職を推薦して下さった。小学校から一挙の格上げ、何があっても頑張らねばと心に誓う。更なるご信頼を頂いた。

Ⅴ　先生は高知大学へご転勤の際　後任に私を推挙して頂き、男子部勤務となる。これまた先生のご信頼。

物事の大成功には師匠の影響が大半を占める。師匠に恵まれた私。前述のⅢ・Ⅳ・Ⅴの如く私は信頼され重宝にして頂いた事を心から感謝している今日である。唯若気で至らなかった私を反省し、先生にお詫び・懺悔しなければならない。先生と十二分の話し合いに時間をとっていたらと、短絡的な悔に悩まされている今日でもある。先生もご郷里の先輩であった手島右卿先生には陰に陽にご影響をお受けになっておられると思います。私も手島右卿先生のご指導頂きました。梅村先生はかけがえのない大先生。先生を裏切った結果になり、再三再四後悔の念を記し…。

先生お聞き届け下さい。　（H22・7・6記）

白雲臨書　風信帖（38）

川崎　白雲　先生

大白雲先生と私（1）

関岡　松籟

川崎白雲先生、生誕一〇〇年を迎え、先生の生誕の地、高知県で、記念事業が盛会に行われますことを心からお喜びし、謹んでお祝い申し上げます。

「川崎先生!!関岡です。」「ああ、関岡君やったか、君のことはよう覚えちゅう。」―固い握手―「君、今どうしゅう。」「大阪市教育委員会で指導主事をしています。そして書道、書写を担当しています。」「先生は？」「高知師範におるんけんど、今どうしようかと思いゆうところや。」「そんなんやったらもう一度大阪へ帰られたらどうですか。」これは、昭和二十五年、大阪市立南中学校の校長室での話であった。先生が高知から同校の宮道馨校長を訪ねてこられたときで、奇しくも小生がそこに居合わせ、大東亜戦争を中に挟んで十数年ぶりの師弟の再会でした。

その日から半月もしないうちに先生から書簡が届いたのです。「君が指導主事として書道を担当していると聞いたので大阪へ行く決心がついた。しかし、大阪へ行って仕事をするには、援助をしてくれる人がいる。教え子三人をつれていくので就職の面倒を見てほしい。」という内容でした。考えてみると先生と教え子三人の生涯にかかわる重要な問題です。それが短い日時の間に即決された先生の決断には驚きました。

「はい、三人の先生の就職は努力します。ぜひ大阪へ帰ってください。」ということになったのです。その教え子三人というのが恩地春洋・小島白洲・岡田米峰の三先生であったのです。

白雲臨書　風信帖（39）

川崎　白雲　先生

大白雲先生と私（2）

関岡　松籟

川崎白雲先生（当時は梅村先生）の紹介で前述の三先生が大阪へ来ていただき大阪の書道書写教育に大きな明りがともりました。そして研究活動が活発になり研究が充実してゆきました。その結果、全国に先駆けて全国書道書写教育研究大会を大阪で開催する事になったのです。各地から多数の参加者があり、多大の成果をおさめました。白雲先生が「よくやった」と喜んで下さった記憶が今蘇ってきます。

川崎先生が高知から大阪へ来られた当時は拙宅の近隣に住居がありました。そのころ近くに大阪市立住吉中学校に勤務していた「中西とみ」という先生がいて大阪暮らしになれない川崎先生夫妻の面倒をよくみておられました。暫くして先生は近畿日本鉄道針中野駅の近くへ転居されました。樟（クスノキ）の大木が茂った静かな住居で家の広間を教室にして先生が書道の指導をしておられました。よく伺ったことが今懐かしく思い出されます。

川崎先生は晩年奥様とともに九州や沖縄で過されました。その後、大阪へこられたときにはいつも「関岡君、今、大阪へきている。三十分ほど時間をくれないか、三十分でよい。」と三十分にこだわった電話がかかってきました。赤いベレー帽をかぶり、天然木のステッキをついた先生が拙宅へこられると家族ともども「書道談義や四方山話」に花が咲き三十分はどこへやら、三時間を過ぎるのを忘れて談笑したことでした。そして「ああ楽しかった、また来るからな。」といって帰っていかれるのは毎度のことでした。沖縄からこられるときには波にさらされた白い大きな珊瑚をよくいただきました。川崎先生は指導には厳しさがありましたが心の温いよい先生でした。

白雲臨書　風信帖

（40）

川崎　白雲　先生

大白雲先生と私（3）

関岡　松籟

私は川崎白雲先生に今の大阪教育大学の前身である池田師範学校で書道の指導を受けました。一昨年師範学校の同窓会が創立百周年を迎えたのですが記念誌に在校中の思い出話を書くようにいわれました。その一部を次に掲載します。

前文略

書道は川崎梅村先生に習いました。書道の時間に半紙作品ということで「宇宙」と書いて提出したのですが、それがどうしたことか宇のかんむりの下が郵便局の（〒）になっていたのです。川崎先生が「君はなかなかよい腕をもっているが誤字を書いたので80点にしておいた。これから書の勉強を続けていきなさい」と励ましを受けました。それから70余年、書の道を究めてきました。今、私は文部省後援の硬毛の書写検定を実施している検定協会の理事をしています。また、書道関係の書籍を多数出版しています。今の私があるのは懐かしの池田の学舎で川崎梅村先生との出会いがあったためと心から感謝しています。真の教育者とは「子供の生涯の幸せを願いながら、子供たちの内奥に潜んでいる可能性を見出し最大限の伸ばすことのできる人」をいいます。

川崎先生と恩地先生

恩地春洋先生ほど師を大切にした人は他にいないと言っても過言ではないでしょう。

川崎白雲先生の存命中は先生の大きな支えの力となり、先生が他界されてからも師を思い先生の作品展や諸行事を計画し実施するなど、六十余年間にわたり師に尽くされました。「修身」という教科が今あるならば「師を思い師に尽くす」という教材になると思います。

先生に心から深甚の敬意を表するとともに玄遠社のますますの隆盛を念じながらペンをおきます。

白雲臨書　風信帖

（41）

川崎　白雲　先生

白雲先生の「お宝」

早村　春鶴

私には、白雲先生の「お宝」が三つある。今でも大切に持ち続けている。

一つ目は、私の雅号と雅印（写真）である。私が此花区の島屋小学校へ赴任をした時、恩地先生という良き師に恵まれ、書の手ほどきを受け、筆友会の会員に入れてもらった。

ある日、中野の白雲先生のお宅へ連れていっていただき、大きな楠と墨の香りにつつまれた部屋で、いきなり、三尺四方の和紙と大きな筆を手渡され、ドキドキしながら書いたことを思い出す。その日、雅号（春洋の弟子であり、舞鶴出身だという意味でついたらしい）と雅印（白雲先生が彫られたとの事）を頂戴した。その時の感動は今も忘れられない。

二つ目は、毎日展初入選の時「継続」という書（写真）をいただき感激したことが思い出される。今、この書を見る度に、書活動を中断したことが悔やまれる。

三つ目は、白雲先生の「お言葉」だ。鷹合小の体育館での研究会の折、「手で書くな。身体で書け。心で書け。魂のこもっていない字は書ではない。」と厳しいご指導を受けた。

恩地先生の「作品は人間の表現である。人間性の表出である。自分の中の自分を案外わかっていない。自然に自己表現できるのは、熱心になったときである。」のお言葉と共に、私の心の中にずっと生き続けている。

これからも、この三つの「お宝」を大切にし人間を磨く努力を継続したいと思っている。